

**ステークホルダーを考慮したパッケージ教材開発
～RRT トレーニングプログラム教材の設計から考察する～**
**Package teaching-materials development in consideration of a stakeholder
It considers from the design of ?**
～RRT training program teaching materials?～

紙谷あゆ美^{*1}, 石井嘉明^{*2}, 浅田義和^{*1}, 中川原好栄^{*1},
 Ayumi KAMIYA^{*1}, Yoshiaki ISHII^{*2}, Yoshikazu ASADA^{*1}, Yoshie NAKAGAWARA^{*1}
 榎本晶^{*1}, 三辻智美^{*1}, 清水広久^{*1}, 池上敬一^{*3}
 Aki ENOMOTO^{*1}, Tomomi MITSUJI^{*1}, Hirohisa SHIMIZU^{*1}, Keiichi IKEGAMI^{*1}

^{*1}JSISH RRT トレーニングプログラム開発チーム

^{*1} JSISH RRT training program development team

^{*2}富士ソフト株式会社 技術本部 技術開発部 研究開発統括室

^{*2}R&D Supervision Section, Technology Development Department, Technology Division, FUJISOFT
INCORPORATED

^{*3}日本医療教授システム学会

^{*3} Japan Society for Instructional Systems in Healthcare

Email: akamiyao@kumadai.jp

あらまし：本プロジェクトチームは新人看護師の認知能力と態度を習得させるため、ID を用いた教材パッケージをデザインした。教材パッケージとは、内容の異なる複数の教材や資料をひとつにまとめることで、組織がめざす新人を育成できる仕様になっているものである。複数の教材と資料は各ステークホルダーを対象にデザインされており、これが新人教育をより効果的にし、さらには病院への教材導入の促進となることを期待している。

キーワード：学習支援環境, e ラーニング教材, Moodle, ID, 新人教育,

1. はじめに

医学分野における医学教育や研修といえば、現場での医療技術訓練と指導が主であり、知識獲得のための勉強会ではスライドや紙媒体のハンドアウトを使った1:数十名のレクチャー形式で行われていた。OJT においても勉強会においても、その内容の質は指導者の知識や伝え方、技術熟達度に大きく左右されるが、これが考慮され評価・改善されることは少なく、したがってその教育による効果も図られていなかったのが現実であった。医療技術とは運動技能である。練習すれば多少の差はあれ、ほとんどの人に習得できるものである。それよりも重要なのは、安全で正確な医療技術を提供するためにさまざまな情報を収集し、状況の分析と解決策を実行できることである。

また、昨今の医療事故や医療訴訟に対する考え方の変化により、患者に対する態度、コミュニケーション、苦情処理、そして職員メンタルヘルスなど、スタッフを育成する段階において技術指導だけでは不十分であることがクローズアップされてきた。技術がどんなに卓越していても「プロ」として一人前ではないことが明らかになってきたのである。しかし、態度や認知の力を植え付けるための、理論に基づいて設計された学習教材や講習はあまり知られていない。

2. 対象者と学習目標

今回設計したパッケージ教材はまさしく「医療のプロ」として必要な要素の一つである「認知」や「態度」を育成するものとなっている。「患者情報を正確に収集できる力」「情報を分析し状況を見極める力」「状況を適切な人材に報告し、患者を危機的状況に陥らせない力」を育成するためのデザインである。

本パッケージ利用対象者は新人看護師、および新人の指導にあたるプリセプターと定めている。新人看護師の学習目標は「今、自分にできることがわかる新人になろう」としており、プリセプターの目標は「新人の気づき・情報の報告を受け、次の行動を正しく指南できる」とした。

3. パッケージの概要

本プロジェクトチームは医療現場における認知能力と態度を習得するため、ID を用いた教材パッケージデザインを行った。ここでいうパッケージとは、内容の異なる複数の教材や資料をひとつにまとめることで、個人と職場のめざす人材を育成できる仕様になっているものを指している。新人看護師が利用するeラーニング教材、指導者であるプリセプターのための集合研修、購入元である教育担当部署に内容をわかりやすく説明したスライド、契約書がその内容である。実施したあとの評価とフィードバックにおいても設計されており、パッケージ利用者の勉

強会や研修での事後評価の負担を軽くできるようにした。

4. プロトタイプ制作までのプロセス

本教材の開発にあたり、まず現状分析をおこなった。RRT トレーニングプログラムに関心がある医師・看護師に集まってもらい、自身の施設スタッフの認知能力について困っていることをディスカッションする場を設けた。RRT とは rapid response team の略で、患者急変を認識し対応するチームのことを指す。知り得た情報から状況を把握し、正確でわかりやすく簡潔な報告の方法を身につけることが重要な RRT のスタッフ育成をモデルとし、本教材ではそれを新人教育に導入できるような学習目標へと変換させデザイン、開発することを決定した。これをうけ、医療技術講習会やチームトレーニングを実施している医師と看護師で開発チームを結成し、目に見える成果をあげるための学習理論をもちいた教材の開発をスタートさせたのである。

次に、ステークホルダーごとの課題分析を行い、学習するにあたりどんな媒体、方法、理論が必要か検討した。新人看護師の教育を検討する際、新人看護師の教育係として置かれているプリセプター（経験 2～3 年目の先輩看護師）のファシリテーション能力やフィードバック方法がなければ、どんなに立派な教材をつくろうとも、現場でそれを活かすためのステップとして不十分である。なぜなら、新人が学んだ内容を知り、それを日常の経験の中で活かすための指導方法を知らないプリセプターが大勢いるからである。したがって本教材にはプリセプター育成のプランを組み込んだ。また教材は無料ではないため、教材を使うメリット・デメリットというものが提示できなければならない。つまり、職場におけるステークホルダーがおおよそ満足という結果がないかぎり、新しい教材を導入してもらうことが難しいのではないかと考えられた。そこでステークホルダーか求める、またステークホルダーがその効果を実感するためのデザインが必要と考え、パッケージに含めることとした。

最後に、このようなステークホルダー毎の教材開発のためにチーム内で担当教材を決め、プロトタイプを作成し形成的評価をおこなった。

5. パッケージ化でもたらされる効果

新人教育において新規に教材や教育手法を導入する場合、その内容は新人に対するものだけで良いのだろうか。組織における人材育成は、教育を受ける直接の対象者（ここでは新人）だけが孤独に学習することではない。職員が相互に影響しあい、経験を共有することで職場の知が蓄積され、さらには集団の知となって組織に役立つのである。つまり、新人が経験を積む場に居合わせる指導者のファシリテーション能力や評価方法が教材に組み込まれていなければ、新人教育に成果を期待することが難しくなる

のである。

また、教材はタダではない。無償配布の教材を使用する、組織内の人間が教育を担うというならば、教育に関する経費を抑えられるかもしれないが、外部からの購入となれば組織の経理や購入決定権を持つ担当者がステークホルダーとなって現れる。本パッケージ教材はこのようなステークホルダーを考慮し、学習者にとっても、指導者にとっても、そして教材を購入したのちにその費用対効果の説明を求められる教育部門にとっても使いやすく、負担が少なくなるようデザインされている。

6. ステークホルダーは誰か

表題にもなっているが、本パッケージは各ステークホルダーのニーズに答えられるようデザインされている。病院とのパッケージ教材ライセンス契約を締結するにあたり考えられるステークホルダーとは、1) 学習者（新人）、2) プリセプター（学習者 2）、3) 教育部署（教材選定者）、4) 予算配分者（購入者）、5) JSISH（本学会と開発グループ）となる。この 5 名においてステークホルダー分析を行い、契約締結に弱みとなる部分をパッケージ開発において補強できるデザインを考慮した。

7. 今後の課題

まずはこのプロトタイプを正規版へとバージョンアップさせることである。正式リリースは JSISH 総会にて公開されるため、あと約半年ですべての教材を完成させなくてはならない。スケジュールの見直しと形成的評価をうけての改善を行なってゆく。また、来年 3 月以降パッケージ教材を病院に導入するにあたり、新人教育に対するニーズが多少異なることが予想される。病床数やどの部署の新人に対する教育かなど、さまざまな背景があるからだ。このような事態にスムーズに対処するため、ベーシックな教材に付加可能なオプション教材もデザインすることを検討中である。また、本教材は JSISH における開発教材のベースとなるパイロットケースであるため、開発プロセスの細かな記録と次への計画として残してゆかねばならない。

8. 参考文献

- (1) 中嶋秀隆, 浅見淳一: “プロジェクトマネジメント 理論編”, pp156-165 (2009)
- (2) 香取一昭: “e ラーニング経営 ナレッジ・エコノミー時代の人材戦略”, p.102-138 (1989)
- (3) 中原淳, 荒木淳子, 北村士朗, 長岡健, 橋本論, : “企業内人材育成入門”, ダイヤモンド社, (2006)
- (4) 鈴木克明: “教材設計マニュアル”, 北大路書房, (2002)